

論 文

国語教育とアダプテーション

—高校「国語総合」教科書の「創作」課題の検証—

“Japanese” Education and Adaptation

—Review of Creative Writing in High-School Textbooks of “Kokugo Sogo (Comprehensive Japanese)” Curriculum—

木村 陽子

Yoko KIMURA

Key words: 国語教科書, 学習指導要領, 創作, アダプテーション, リライト

はじめに

戦後わが国では、現在までに8度にわたる教育課程の改訂が行われており、高等学校では2008年に公示された学習指導要領「生きる力」が2013年度より全面施行されている。現・学習指導要領は、①PISAなど国際比較の調査結果に基づく「学力低下問題」への教育界の深刻な懸念や、②学校週5日制の導入などの、いわゆる「ゆとり」教育に対する世論の批判を背景として前・学習指導要領を大幅に見直す内容となった⁽¹⁾。具体的には、情報化社会、グローバル社会を生き抜くのに必要不可欠な技能を「学力」として再定置し、これまでの「習得」型から「活用」型・「探求」型学習への大転換が図られた。

とりわけ国語科においては、情報処理やコミュニケーション能力の伸長が意図された「活用」型の言語力が求められるようになり、これまでの読解力の育成中心の内容から、小学校から高校に至るまで「創作」活動が多く盛り込まれた。読解と表現のバランスの取れたハイブリッド型⁽²⁾カリキュラムへの移行は、「活用」の領域が拡げられた具体例として注目が集まった。

ただし、「創作」活動といっても、ゼロから物語を創作するのではなく、ある種の土台の上に創作を展開する課題がその中心に据えられたことには注意しておきたい。例えば、高校国語科の必修科目である「国語総合」の

現・学習指導要領には、「C 読むこと」の「言語活動例ア」に「文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること」との記載がある。

一般に文学研究においては、小説を脚本へ、戯曲を映画台本へといった〈メディア変換〉を伴うような創作手法、あるいは、古典を現代の物語に書き換えるような〈時代設定を変換〉する創作手法を「アダプテーション」(翻案)と呼んでいる⁽³⁾。つまり、現行の高校「国語総合」においては、創作活動の一環としてこの「アダプテーション」が重要な指導事項として浮上したことになる。

他方、こうしたアダプテーション課題は、高校国語科の他の科目にも見ることができる。選択科目のひとつである「国語表現」の学習指導要領では、「言語活動例イ」(「詩歌や小説の創作、鑑賞したことを書く言語活動」)の解説として「この言語活動には、小説や物語を詩歌に、詩歌を小説に、古文や漢文を現代の小説に書き直すことなども含まれる」と言及されている。また、「現代文B」の「言語活動例ウ」(「表現の仕方を考えたり、創作的な活動をしたりする言語活動」)の解説の中にも、「文学的な文章を読んでその内容を戯曲や脚本に翻案したり、実際に演じたりすること」との言及がある。すなわち、高校国語の学習指導要領では「国語総合」、「国語表現」、「現代文B」といった、学科全体の広範囲の科目細目にわたって、創作手法としてのアダプテーションに大きな期待が

寄せられていることが見て取れるのである。

高校国語においてアダプテーション課題が多く盛り込まれた意図や効果について触れた、現行の学習指導要領の中の言及をまとめると以下ようになる。

- ① 「読む」ためには「読む」という言語活動だけでは不十分であり、翻案など「表現」する言語活動も併せて行うことで、主体的な読みの確立につながる。
- ② 翻案することによって、その文章の内容や表現が一層深く捉えられる。
- ③ 「脚本に」するという言語活動を通して、戯曲というジャンルへの理解が深められる。
- ④ 古典を現代の物語に書き換えることを通して、昔の人々のものの見方、感じ方、考え方についての理解が深められる。
- ⑤ 和歌の本歌取りや謡曲など、日本文化は伝統的に「翻案」と縁が深いため、翻案を学ぶことを通して、広く言語文化への理解を深めることができる。
- ⑥ 文学的文章を創作・翻案することで、言語文化の創造へ参画する意識を高めることができる。

上記の言及からも、「高等学校学習指導要領・国語」の創作活動においてアダプテーションに寄せられた期待は相当に大きかったと言えるだろう。本稿では、以上のような問題関心から、現・学習指導要領にアダプテーション課題が多く盛り込まれるに至った背景・要因を明らかにするとともに、特に、各教科書会社がこの新しい課題を具体的にどのようなかたちで教材化したのか（あるいは、しなかったのか）について、高校国語の必修科目である「国語総合」を例に、以下に検証を試みていきたい。

1. 学習指導要領のアダプテーションへの期待

現・学習指導要領が制定されるまでの改訂の議論は、前・学習指導要領が全面実施（小学校 2002, 中学校 2003, 高校 2004）された時期と、ほぼ同時に早くも 2004 年に始まっている。2004 年 2 月 3 日付の「これからの時代に求められる国語力について」と題された文化審議会の報告書には、「演劇などを取り入れた授業を」という項目があり、「国語科の授業の中で、暗唱し、身体で表現することのすばらしさを体験させる必要」が唱えられ、早くも旧来の「習得」型の授業からの脱皮と、「活用」への模索が示唆されている⁽⁴⁾。

2008 年に文部科学省が外部機関に調査させたレポー

トでは、「国語専門家会議による教科書の改善・充実に向けた 11 の提言」のひとつとして「演劇教材を復活させる」ことが盛り込まれ、A4 で 4 ページ相当にわたり、国語教科書での演劇的活動の積極的な導入の効用が説かれており、より積極的な変革の姿勢がうかがわれる⁽⁵⁾。

ただし、この段階での「演劇」への関心は、「a.ことばにおける身体性の復権」、「b.ことばにおける対話性の回復」という前掲レポートの項目からも窺えるように、国語教育に演劇的手法を取り入れることで、対話力やコミュニケーション力の向上という側面での「活用」を期待する意図が大きかった。必ずしも、「創作活動」の重要性、あるいは、〈文章の脚本化〉といったアダプテーションへの関心はまだ見られない。

一方、最終的に発表された高校国語科の現・学習指導要領では、ことばの持つ身体性や対話性の向上を目的とした朗読や実演の域を超えて、「表現」「創作活動」の一環としてのアダプテーションが重要な指導事項として浮上している。

管見の限りでは、この間の経緯を精確に跡付けた資料や先行論は存在しないが、「創作活動」重視の姿勢への転換の背景には、2003 年、2006 年に実施された OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）の結果が影響していると推察する。両年の PISA「読解力」では、順位が 14 位、さらには 15 位と、諸外国に大きく劣後したことが明確になった。そのため、当時の日本の教育界では、「PISA 型読解力」上位国の教育実践から積極的に学んでいこうとする機運が生じた。とりわけ 2006 年の調査で科学的リテラシー 1 位、数学的リテラシー 2 位、読解力 2 位と、3 分野すべてで高得点を挙げたフィンランドへの注目が集まり、「フィンランド・メソッド」と呼ばれる同国の読解力向上プログラムを導入しようとする動きが各方面で高まった⁽⁶⁾。

フィンランドの教育ではグローバルコミュニケーションの視点から、「自分の意見を、多様な価値観を持った人に対しても伝えることができる表現力を身に付けよう」という発想がある⁽⁷⁾。そのため「フィンランド・メソッド」では、表現や創作活動が重視されており、さまざまな情報を咀嚼して物語や演劇として発信する能力が強く求められるカリキュラムとなっている。

試みに、小学 4 年生を対象とした同国の国語教科書を確認しよう。たとえば、「ヒツジ飼いとオオカミ」の物語を子どもたちに読ませたとする。フィンランド・メソッドに基づく国語教科書では、次なる段階として「主人公と物語の内容は同じまま、場面を現代の世界に変えま

しょう」というアダプテーション課題を出し、そのうえで「この物語を、人形げきか、影絵げきにしましょう」と実演にまで繋げていく。

あるいは「町ネズミと、いなかネズミ」の冒頭の場面のみを読ませたとする。フィンランド・メソッドでは次なる段階として、「そこで、何が起こりますか。話の続きを想像して、書きましょう」という創作課題を出す。さらに、「この話を、自分の言葉で書き直し、げきにしましょう」とアダプテーションへと導き、最終的には「この話を音声げきにして、録音してみましょう。効果音を工夫すること」といった実演にまで持っていく⁽⁸⁾。このように、フィンランドの子どもたちは、物語の創作や、メディア変換を行うアダプテーション、さらには実演にまで至る豊かな表現活動を、幼いころから国語の授業を通して何度も経験しているのである。

そうした「フィンランド・メソッド」の日本における受容ともかかわりながら、文部科学省からの信頼を高めていったのが、教育学者・実践家の大内善一である。彼は文部科学省によって招集された国語専門家会議の中心メンバーであり、現・学習指導要領国語の編纂においても中心的な役割を果たした。

大内は、過去わが国の国語教育で中心をなしてきた、「生活作文」一辺倒の教育を批判し、表現指導に重きを置いた「創作作文」の必要性を長く主張してきた人物である。また、演劇的手法を国語の授業の中で活用していくことにも早くから熱心であった。

2002年に行われた講演ですでに、大内は「国語教室に演劇的空間を作り出していく必要がある」と主張しているが⁽⁹⁾、彼は前掲した「演劇教材を復活させること」を提案した2008年レポートの文責者でもあった。その大内が、1996年に小学校での実践例として発表した『書き足し・書き換え作文の授業づくり』（『実践国語研究』別冊、156号、明治図書）の中で推奨していた「書き換え作文」の手法が、実は〈メディア変換〉としての「アダプテーション」に相当するものであった。これについて、大内は2006年の講演の中で次のように言及している。

書き換えるという方法は、例えば、詩歌を散文に書き換える、韻文の言葉を散文の言葉に書き換えるということ。韻文の言葉と散文の言葉とは言語が違います。…韻文は言葉を圧縮しております。これ以上詰めることはできないぐらいにです。…それに対して、散文の言葉、物語などはより多くの言葉を尽くして、会話の表現などを

用いながら、その場面や状況というものを事細かに具体的に描き出す、そのような言語が散文なのです。…書き換え作文の意義というものは、思考の屈折によって思考の集中が生まれる、子どもたちがその書く活動に熱心に取り組むことにつながるのだと思います。そこには、題材の面白さというものも大いに関係しているかと思いますが、この題材への着眼ということも含めて、この「書き換え作文」を提唱したわけです。「リライト」とか「翻作」などという言い方をする人もいますが、分かりやすく「書き換え」と言えばよろしいのじゃないでしょうか。⁽¹⁰⁾

すなわち、大内は、単なる作文ではない、そこに創作性の含まれる「書き換え作文」を強く提唱したのであり、そうした彼の理論が現・国語科指導要領の改訂議論の中で注目され、重要視されるようになったものと推察される。結果、2009年に公示された「高等学校学習指導要領・国語」「国語総合」の「C 読むこと」「言語活動例ア」として、下記の言葉が盛り込まれた。

「文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること。」

この一文からは、前述したような「国語教室に演劇的空間を作り出していこう」という意図と、「創作手法としてのアダプテーションに期待しよう」という意図の両方を観取することができるが、次章で本論が中心的に検証していくのは、後者の方である。

文部科学省が「創造性」や「表現力」の育成を前面に押し出した学習指導要領を公示したことは、戦後の国語教育史において画期的であったことは間違いない。しかしその反面、昭和30年代をピークとして、教科書から戯曲教材が減少の一途をたどり、2000年代初頭には、ついに戯曲教材がゼロとなっていた国語教育の実情⁽¹¹⁾を鑑みれば、メディア変換を伴うアダプテーション課題や実演をも含む脚本の創作といった学習課題は、経験や技術、知識に自信が持てない教員たちにとって、過度の負担と受け止められたことは想像に難くない。

そうした現場レベルでの不安や反発を和らげる目的からか、文部科学省は現行の高校学習指導要領の実施開始前年の2012年、ウェブ上の映像で演じられているシーンに基づき「子どもたち自身が脚本家・演出家となり、自分なりに工夫して演劇を作る」ことを目的とした「演劇メーカー」(平田オリザ監修)をホームページ上で公開し、関係者の理解を深めようと努めている⁽¹²⁾。

また、同じく2012年、文部科学省は『言語活動の充

実に関する指導事例集【高等学校版】』を刊行し、「国語総合」「言語活動例ア」のアダプテーション課題を意識した指導事例として、①芥川龍之介「羅生門」、②『大鏡』「肝試し」の2例を示し、実践的な解説を施している。たとえば「羅生門」では、「作品中の設定を一つだけ変え、作者の表現の工夫を活用しながら『羅生門』を書き換える」という学習活動例が提示された⁽¹³⁾。あるいは、『大鏡』「肝試し」では、「現代語訳を活用しながら、脚本を作る」という学習活動例が紹介された⁽¹⁴⁾。

では、そうした文部科学省側の意図を汲んだうえで編纂されたであろう、各種教科書会社の検定教科書で、「アダプテーション」課題は具体的にどのようなかたちで教材化されたのだろうか。

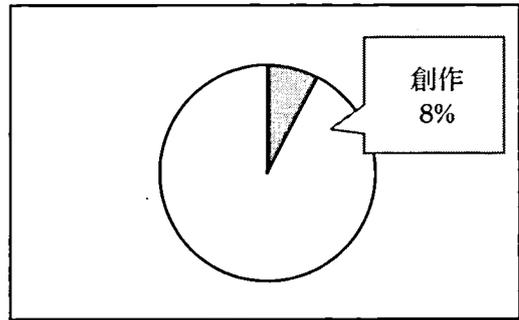
次章では、現在刊行されている高校向けの「国語総合」教科書24冊を対象とした、「創作」教材の分析を試みていく。

2. 「国語総合」での教材化事例

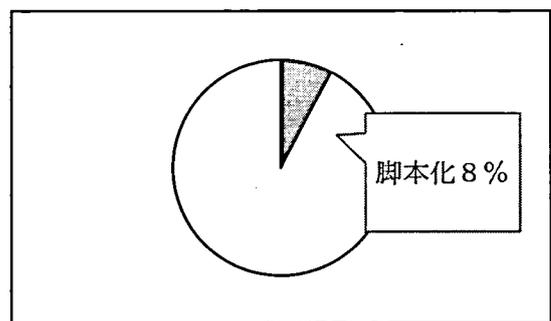
筆者は、現在刊行されている高校「国語総合」の教科書、延べ24冊を対象に、文学教材の中で「創作」活動を伴う課題がどのように取り入れられているかについての調査を試みた（「別表：現行「国語総合」掲載・「創作」課題一覧」を参照⁽¹⁵⁾）。

その結果は、各教科書会社によって、学習指導要領「C読むこと」の「言語活動例ア」に対応したアダプテーション課題を意欲的に取り入れているもの(6, 15, 16)、まったく取り入れていないもの(1, 9, 10, 11, 14, 17, 23)など、内容的にかなりばらつきが見られた。しかし、それらを念頭に置いた上で、調査の結果から以下の4つの特徴を指摘したい。

第一に、全24冊中、完全にゼロからの〈創作〉の課題を取り入れた教科書は、(18)筑摩「精選国語総合・改」ほかの2冊(全体の8%)に留まっている。言い換えれば、残りの9割強の教科書は、〈創作〉そのものの課題は取り入れていないということだが、そもそも学習指導要領自体が、そうした課題の設定を中心軸とはしていないことから、このこと自体は首肯できる。



一方、学習指導要領で明確にうたわれている〈文章の脚本化〉というアダプテーション課題が、実際には明治書院が刊行した(15)『新精選国語総合』、(16)『新高等学校国語総合』の2冊(全体の8%)にとどまったという点には、その数の少なさに疑問が残る⁽¹⁶⁾。もともと、前掲、フィンランドの国語教科書にも見たように、〈文章の脚本化〉を求めるアダプテーション課題の先には「実演」という、次なる表現課題が意図されていることが多い。前述したように、「C読むこと」「言語活動例ア」には、「国語教室に演劇的空間を作り出していこう」という意図が含まれていた。つまり、「演劇の実演」まではいかなくとも、「脚本のリーディング発表会」くらいは実施してほしいというのが、学習指導要領の編纂者側の本意であったと思われるが、〈文章の脚本化〉の実際の授業運営におけるハードルが、編纂者の想像以上に高かったということだろう。



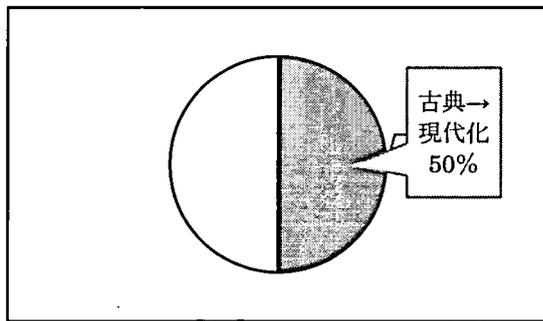
小学校国語での平易な物語教材とは異なり、高校国語レベルの文学教材には複雑かつ難解な内容を備えるものが多く、それらの脚本化指導を各教員の自助努力にゆだねることは、現実問題として至難であったと言わざるを得ない。〈文章の脚本化〉教材の少なさは、教科書会社がそうした現場教員の骨折りを回避しようとする配慮が働いたためと推測できる。

別表：現行「国語総合」掲載・「創作」課題一覧

番号	出版社	教科書名	文学掲載作品	課題	種類
1	東書	国語総合	なし	—	—
2	東書	新編国語総合	伊勢物語「筒井筒」	古典→現代小説	アダプテーション
3	東書	精選国語総合	伊勢物語「筒井筒」	古典→現代小説	アダプテーション
4	三省	高等学校国語総合・改	芥川龍之介「羅生門」	書き足し（続き）	リライト
5	三省	精選国語総合・改	芥川龍之介「羅生門」	書き足し（続き）	リライト
6	三省	明解国語総合・改	角田光代「ベトナムのコーヒー屋」 宮沢賢治「なめとこ山の熊」 短歌×3（永田紅ほか） 芥川龍之介「羅生門」 枕草子「にくきもの」 伊勢物語「芥川」 于武陵「勸酒」／井伏鱒二「勸酒」	書き足し（手紙） 書き足し（部分） 短歌→小説 書き足し（続き） 古典→現代小説 古典→現代小説 漢文→現代詩	リライト リライト アダプテーション リライト アダプテーション アダプテーション アダプテーション
7	教出	新編国語総合	村上春樹「夜中の汽笛について、 あるいは物語の効用について」 竹取物語 伊勢物語「花橘」	書き足し（続き） 書き足し（手紙） 古典→現代小説	リライト リライト アダプテーション
8	教出	精選国語総合	中島敦「名人伝」	書き足し（続き）	リライト
9	大修館	国語総合・改	なし	—	—
10	大修館	新編国語総合・改	なし	—	—
11	大修館	精選国語総合・新訂	なし	—	—
12	数研	国語総合・改	芥川龍之介「羅生門」 田宮虎彦「沖縄の手記から」 宇治拾遺物語「児のそら寝」	書き足し（続き） 書き足し（手紙） 古典→現代小説	リライト リライト アダプテーション
13	数研	高等学校国語総合・改	芥川龍之介「羅生門」 志賀直哉「清兵衛と瓢箪」 田宮虎彦「沖縄の手記から」 宇治拾遺物語「児のそら寝」	書き足し（続き） 書き足し（続き） 書き足し（手紙） 古典→現代小説	リライト リライト リライト アダプテーション
14	数研	新編国語総合	芥川龍之介「羅生門」 志賀直哉「清兵衛と瓢箪」 田宮虎彦「沖縄の手記から」	書き足し（続き） 書き足し（続き） 書き足し（手紙）	リライト リライト リライト
15	明治	新精選国語総合	太宰治「富嶽百景」 竹取物語「かぐや姫の生い立ち」	小説→脚本 古典→現代小説	アダプテーション アダプテーション
16	明治	新高等学校国語総合	太宰治「富嶽百景」 竹取物語「かぐや姫の生い立ち」	小説→脚本 古典→現代小説	アダプテーション アダプテーション
17	筑摩	国語総合・改	芥川龍之介「羅生門」 川上弘美「神様」 林京子「空き缶」	書き足し（続き） 書き足し（日記） 視座転換	リライト リライト リライト

18	筑摩	精選国語総合・改	短歌×16 (与謝野晶子ほか) 夏目漱石「夢十夜」	短歌→小説 参考にして創作	アダプテーション 創作
19	第一	国語総合・改	伊勢物語・和歌 (風吹けば) 伊勢物語・和歌×3 小野小町・和歌 (花の色は)	古典→現代小説 古典→現代化 古典→現代化	アダプテーション アダプテーション アダプテーション
20	第一	新訂国語総合・改	伊勢物語・和歌 (風吹けば) 伊勢物語・和歌×3 小野小町・和歌 (花の色は)	古典→現代小説 古典→現代化 古典→現代化	アダプテーション アダプテーション アダプテーション
21	第一	標準国語総合・改	伊勢物語・和歌 (風吹けば) 伊勢物語・和歌×3	古典→現代小説 古典→現代化	アダプテーション アダプテーション
22	第一	新編国語総合・改	伊勢物語・和歌 (風吹けば) 伊勢物語・和歌×3 小野小町・和歌 (花の色は)	古典→現代小説 古典→現代化 古典→現代化	アダプテーション アダプテーション アダプテーション
23	桐原	国語総合	なし	—	—
24	桐原	新探求国語総合	宮本輝「途中下車」	書き足し (手紙) × 2 書き換え (内容変更)	リライト 創作

現行「国語総合」における創作課題の第三の特徴として指摘したいのは、〈文章の脚本化〉がほとんど取り入れられなかったこととは対照的に、〈古典を現代の物語に書き換える〉アダプテーション課題 (古典→現代小説、漢文→現代詩) の方は、全24冊中12冊 (50%)、延べ21課題も取り入れられていたという点である。

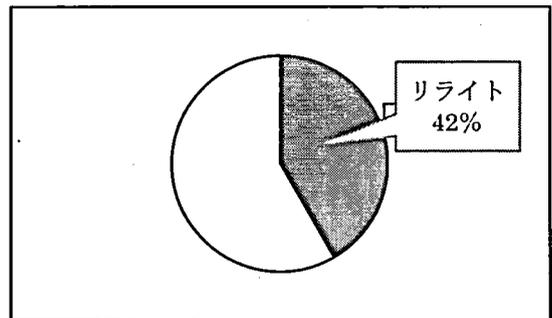


この点に関しては、学習指導要領の中でも次のように言及されている。

古典を読み味わうためには、古典を理解するための基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けていなければならないことは言うまでもない。しかし、従来その指導を重視し過ぎるあまり、多くの古典嫌いを生んできたことも否めない。そこで、指導においては、古典の原文のみ

を取り上げるのではなく教材にも工夫を凝らしながら、古人のもの見方、感じ方、考え方に触れ、それを広げたり深めたりする授業を実践し、まず、古典を学ぶ意義を認識させ、古典に対する興味・関心を広げ、古典を読む意欲を高めることを重視する必要がある⁽¹⁷⁾。

つまり、〈時代設定の変換〉を求めるアダプテーション課題は、古典文法の暗記や逐語訳が求められるような従来型の授業よりも、創作性が許容される点でより自由度が高く、生徒たちの興味・関心・意欲を高めやすいと判断され、より積極的に取り入れられたと考えられる。



さらに、第四の特徴として指摘したいのは、とりわけ現代文の文学教材の「創作」課題として多くの国語教科書が取り入れたのは、実際には〈文章の脚本化〉や〈古

典の現代化」といった学習指導要領に明示されている「アダプテーション」ではなく、教育学者であり、現行の学習指導要領策定にも影響力をもった大内善一の主唱していた「書き換え作文」に相当する「リライト」であったという点である。

現代文の文学教材をベースにしたアダプテーション課題が24冊中2冊(全体の8%)、延べ2例にとどまったのに比して、リライト課題は、全24冊中10冊(全体の42%)、延べ21例にものぼっている。(注:教科書によっては複数の「創作」課題を取り上げているため、各カテゴリーの%の総和は100%にはならない。)

このように概括してみると、現・高校国語指導要領において大いなる期待をもって導入された「創作」分野での「アダプテーション」の活用は、実際には「古典の現代化」が中心になっている一方、現代作品についてはむしろ「リライト」教材が採用されていることがわかる。

この現代文の文学教材を対象とした「リライト」課題については、次章でいまいし考察を進めたい。

3. 「リライト」課題の特徴

前掲「別表」に見るように、今回の調査で検証した24冊で確認したリライト課題は、大きく3つに分類できる。

第一は、文学テキストの「続き」を想像させる創作課題である。資料では、便宜上、「書き足し(続き)」と表している。具体的には、芥川龍之介「羅生門」(4, 5, 6, 12, 13, 14, 17)、村上春樹「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」(7)、中島敦「名人伝」(8)、志賀直哉「清兵衛と瓢箪」(13, 14)で、延べ11例確認できた。

たとえば、「羅生門」(4)(5)では、「下人はその後どうなったと思うか。本文の内容に即して、続きの物語を作ってみよう。」(「言葉と表現」という課題が、「夜中の汽笛について、あるいは物語の効用について」(7)では、『今度は少女が自分の物語を語り始める。』という作品の末尾に続けて、『少女』の物語を自由に書いて、読み合ってみよう。』(「学習の手引き6」という課題が出されている。

リライト課題の第二の例は、作中人物AからBに宛てた手紙という設定で、実際には描かれていない架空の手紙を、一登場人物の視点から書かせる創作課題である。資料では、「書き足し(手紙)」と表している。

具体的には、角田光代「ベトナムのコーヒー屋」(6)、田宮虎彦「沖縄の手記から」(12, 13, 14)、宮本輝「途中下車」(24)で、延べ6例確認できた。

たとえば、「沖縄の手記から」(12, 13, 14)では結末で、実際には戦死している作中人物(当間キヨ)が生きていたと「仮定して、生き延びたキヨから『私』に宛てた手紙を、八百字程度で書いてみよう。」(発展1)という課題が設定されている。他方、「途中下車」は、自身も心を寄せていた美少女と、今は亡き「友人」の仲を、心ない嘘によって引き裂いた「私」の悔悟を後年綴った短編小説だが、桐原書店(24)は本作に、『私』の立場から、死んでしまった『友人』への謝罪の手紙を書いてみよう。」(演習1)、『私』の立場から、『彼女』への謝罪の手紙を書いてみよう。」(演習2)という「書き足し(手紙)」のワークを課したうえで、『私』が『彼女』にうそをつかなかったという想定のもとで、二三六ページ17行目以降の内容を書き換えてみよう。」(演習3)という「書き足し(続き)」課題を出している。

また、「書き足し(手紙)」に類したリライト課題に、作中人物に成り代わって日記を創作するという課題がある。資料では「書き足し(日記)」と表した。たとえば川上弘美「神様」(17)では、『眠る前に少し日記を書いた』(八五・8)とあるが、どのような日記か。『わたし』になったつもりで二百字以内で書いてみよう。」(表現2)という課題が設定されている。

さらに、リライト課題の第三の例として「視座転換」を挙げたい。これは、実際の物語の語り手や視点人物とは異なる登場人物の視点から、物語を書き換えることを意味する。たとえば、林京子「空き缶」(17)は、長崎の女学校在学中に被爆を経験した「私」たち数名の仲間が30年後、母校を訪問する小説だが、これに対し、筑摩書房『国語総合・改訂版』では、仲間内で唯一被爆経験を持たない作中人物「西田」の視点から「この母校訪問を書くときどのようなものになるか、想像してみよう」(表現2)という課題が設定されている。

筆者は、数年来、勤務する複数の大学の教職志望の学生たちに、高校国語科を主として想定した国語教育の指導を行っているが、現代小説を題材とする「創作」活動としては、学習指導要領が例示しているような本格的なアダプテーションである「脚本化」よりも、各教科書会社が作成した教材化例に見たような「リライト」課題の方が、よりアプローチがしやすいことを実感している。実際、学生たちは、筆者が設定した「リライト」課題に対して、目を見張るような創作力を発揮してくる。読解力や表現力を育成するために、「リライト」課題が具体的にどのように教育教材として優れているのかについては、さらに詳述する必要があるが、まずは本稿では、読

解力や表現力の伸長を意図した創作課題として、「リライト」という手法に注目が集まり、多くの「国語総合」の教科書に実際に採用されているのだという事実を指摘するにとどめたい。

4. まとめ

本稿では、現行の高校「国語」の学習指導要領の中で、「創作」が重視され、特に「アダプテーション」にスポットライトがあてられていることを指摘し、具体的に高校「国語総合」の教科書における「創作」課題の取り上げられ方を検証してきた。結果、「古典の現代化」の教材と、「現代小説からのリライト」という教材が、現行教科書では多く採用されていることを示し、それぞれに意味があることを確認してきた。

今後の課題は、現・学習指導要領下に編纂された国語教科書において、特徴的な取り上げられ方をしている「リライト」教材の有効性を、いま一度確認するということがある。そして、その上で、次期学習指導要領での「創作」や「表現」課題の方向性を探ることが重要であろう。とりわけ筆者が現時点で興味深く見守っているのは、選択必修科目のひとつである「文学国語」での「創作」の取り扱われ方であるが、それらについても引き続き考えていきたい。

注

- (1) 平成20年1月17日、中央教育審議会総会取りまとめ文書「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」p.9及びp.17ほか
- (2) 田中博之・蛭谷みさ(2017)「小学校国語科学習における物語創作の授業開発～単元『とべないほたる第13巻を創ろう!』の型を用いる指導技術の分析～」早稲田大学大学院教職研究科紀要, 第9号, p.89.
- (3) リンダ・ハッチオン「アダプテーション理論」(原著2006年/邦訳2012年)などに詳しい。
- (4) 文部科学省・文化審議会(2004)「これからの時代に求められる国語力について」
<http://www.mext.go.jp/b-menu/shingi/bunka/toushin/0420301/015.htm>
- (5) 文部科学省・みずほ総合研究所株式会社(2008)「教科書の改善・充実に関する調査研究報告書(国語)―平成18,19年度文部科学省委託事業『教科書の改善・充実に関する研究事業』―」
<http://www.mext.go.jp/a-menu/shotou/kyoukasyo/>

[seido/08073004/002.htm](http://www.mext.go.jp/seido/08073004/002.htm)

- (6) 「フィンランド式に学ぶ」朝日新聞, 2010年12月12日, 朝刊, p.31.
- (7) 諸葛正弥(2008)『フィンランドメソッド実践テキスト』毎日コミュニケーションズ, p.7.
- (8) メルヴィル・バレ/マルック・トッリネン/リトバ・コスキパー著 北川達夫&フィンランド・メソッド普及会訳編(2005)『フィンランド・メソッド5つの基本が学べるフィンランド国語教科書』小学4年生, 経済界, pp.45, 87.
- (9) 大内善一(2012)『国語科授業改革への実践的提言』溪水社, p.230.
- (10) 大内前掲書, p.181.
- (11) みずほ総合研究所(2008)前掲レポートの「第1章4.2.(3)演劇教材を復活させる」における記述
- (12) 文部科学省, 演劇メーカー
<http://engeki.mext.go.jp/>
- (13) 文部科学省(2012)『言語活動の充実に関する指導事例集【高等学校版】』, pp.27-28.
- (14) 前掲『言語活動の充実に関する指導事例集【高等学校版】』, pp.33-34.
- (15) 1つの教科書会社が複数の教科書を出版しているが、それぞれ1冊としてカウントして比率を判定している。また、各教科書が実際にどの程度採用されているかどうかについては、全く考慮していない単純集計である点は留意されたい。
- (16) 明治書院刊行『新精選国語総合・現代文編』『新高等学校国語総合・現代文編・表現編』では、次の課題を設けている。『富嶽百景』(一九一～二〇八ページ)を読んで、『その頃、私の結婚の話も、一頓挫の形であった。』～『みるみる山は、真っ黒い冬木立に化してしまった。』の場面を取り上げ、劇や映像で見せるつもりで脚本を作ってみよう。(課題1)
- (17) 文部科学省(2010)『高等学校学習指導要領解説・国語編』教育出版, p.38.

(付記)本研究はJSPS科研費 15K02186の助成を受けたものです。